
Peter von Moos:

Geschichte als Topik.

*Das rhetorische Exemphum von der Antike zur Neuzeit
und die historiæ im "Policraticus" Johannes von Salisbury*

Olms, Hildesheim, 1988, pp.656

甚 野 尚 志

12世紀の人文主義者ソールズベリのヨハネス（1115/20-1180年）の研究で、大きな画期となったのは、現在アーヘン大学の中世ヨーロッパ史の教授マックス・ケルナーの教授資格取得論文（M.Kerner, *Johannes von Salisbury und die logische Struktur seines Policraticus*, Wiesbaden, 1977）であった。これは、ヨハネスの伝記的事実から思想の系譜関係まで、それまでのハンス・リーベシュツらの研究を根本から批判したもので、現在のソールズベリのヨハネス研究の基礎を形成したとあってよい。評者自身も20年以上も前に、ヨハネスの研究を始めるにあたって、もっとも大きな刺激を受けたのはこのケルナーの著書であった。

だがその後、ヨハネスの思想分析について、まったく新しい視点からの研究が現れた。それが、ここで紹介するベーター・フォン・モースの著書である。初版の刊行は1988年で、10年以上も前だが、この書の評価はまだ十分に定まったとはいえず、ここで簡単に紹介しておくことも意味あることだろう。フォン・モース自身は、すでに中世思想史の分野ではよく知られた学者であるが、本書では、ヨハネスの『ポリクラティクス』を「例話（*exempla*）」の視点から分析することで、ヨハネスのテキスト解釈に新しい可能性を切り開いている。

この書で分析の中心にすえられている「例話」はいうまでもなく、古典古代から近代にいたるまで、論証のひとつの手段として修辞学での重要なテーマとされてきたものだが、フォン・モースは、古代以来の修辞学の伝統のなかで、『ポリクラティクス』での「例話」の機能を分析するとともに、『ポリクラティクス』において、「例話」と「歴史（*historia*）」という言葉がほとんど互換的に用いられることから、「例話」を

分析することで、ヨハネスの「歴史」の観念の再検討も行っている。

フォン・モースによれば、『ポリクラティクス』の全 8 巻には、総計 790 もの「例話」がちりばめられている。それらは、古代の異教作家の著作から取られた歴史的例話、あるいは神話的例話、また旧約・新約聖書のなかで言及される例話、さらには中世に入ってからの民間伝承、また同時代の出来事にもとづく逸話に分類される。こうした数多くの「例話」は、ヨハネスにより「歴史」とも呼ばれるだけでなく、ヴェゲティウス流に「戦略 (strategema)」などともいわれるのだが、それらはヨハネスの政治論、あるいは道徳論の命題を論証するために、『ポリクラティクス』のなかで重要な役割を果たしている。まさに、さまざまな権威の語る事例を規範として、自己の論理を証明していくというやりかたが、ヨハネス独自の論証のスタイルであった。

だがこのように、古典の諸権威から取られた雑多な逸話で『ポリクラティクス』の半分以上の頁が埋められていることについては、フォン・モース以前の研究では否定的な評価しか与えられなかった。たとえばホイジンガなどは、ヨハネスが「古代の先達たちへの敬意を今少し少なくし、より多くを彼自身および彼の時代について我々のために語ってくれたらと思います。彼が自己の姿を、コルニフィキウスとかグナトーとか、あるいはまた、トラソーとかタイスなどの古代の衣裳で変装させたりしなければよかったのです」(『文化史の課題』里見元一郎訳、東海大学出版会、1978 年、141-142 頁)と語り、古典からの引用が多すぎることを嘆いた。また、ヨハネスの書簡集を校訂した C.N.L.ブルックは、『ポリクラティクス』が「色彩豊かな諸権威のモザイク」にすぎないことを指摘し、「ヨハネスには、ひとつの本を書く能力が欠けている」とまで断言する。いずれにせよこれまでの多くの研究者は、ヨハネスが現実の道徳や政治を論じるにはあまりにも古典の例話に依拠しすぎ、またそこには論理性がなく、現実を直視する精神も欠如していると批判してきた。

だがフォン・モースは、こうした「例話」と「歴史」とが互換的に使われる『ポリクラティクス』の思想構造のなかにこそ、ヨハネスの歴史観の特徴をみいだす。すなわち、ヨハネスにとり「歴史」とみなされるのは、権威的著作の背後にある史実ではなく、諸権威が「例話」により伝える古代人の言行なのである。諸権威が教える道徳的・論証的な範例こそが、ヨハネスが求める「歴史」の真髓であり、それは、権威の言説の背後にある史実を批判的に探究しようとする態度とはかなりちがう。

ヨハネスは『ポリクラティクス』の序で、自分がアレクサンドロス大王もカエサル

も個人的には知らないこと、また、ソクラテスもゼノも、プラトンもアリストテレスも自分の耳でその議論を聴いたわけではないことを述べた上で、そのような人々の言行を知りうるのは、古代の著作家たちの伝承＝「歴史」のおかげであることを強調する。そして彼は、「人間の生の教師」としての役割を「歴史」に与える。『ポリクラティクス』では、過去の支配者たちが「なしたこと (facta)」と過去の哲学者が「語ったこと (dicta)」の例示から、政治と道徳のあるべき姿を議論することが意図されているが、そうしたヨハネスの方法の根幹に、このような彼の「歴史」の観念があることはいうまでもない。

さらに、ヨハネスが古典に依拠して語る「例話」では、しばしば、もとの「例話」の登場人物や事実が改変されているが、こうした史実の厳密さへの無頓着な態度も、ヨハネスにとり「歴史」と「例話」がほぼ同義であることを知れば容易に理解できよう。つまり彼にとり、「歴史」を知ることは論証や教訓の規範をえることにほかならず、そのかぎりでの史的な人名や事実の詳細は、第二の問題となる。『ポリクラティクス』では、ある逸話の主人公が「ヘンリクスであろうがロベルトゥスであろうが大した問題ではない」とか、またある場合には、「プロタゴラスがいったことであろうがピタゴラスであろうが、そんなことは重要ではない」とかいわれる。また他のところで、ホメロスとプラトンを混同しながら、「偉大な人物はいくつかの名前をもつのだ」などとうそぶいたりする。ここからヨハネスが、古典のテキストの外に存在する史実には無関心であったことがわかるが、この態度はヨハネスだけではなく、他の中世の著作家の歴史観にもみてとれるものであろう。

以上、フォン・モースの議論のうち、重要と思われる点をかいつまんで述べてきたが、いずれにせよこの大著は、ヨハネスの歴史観のみならず、中世の知識人にとっての歴史の観念を知る上で非常に示唆するところの多い書物である。
